日本IT書紀

058 誤認

04 含牙篇
巻之七 乾坤

佃 均

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は
https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。

第五十八　誤　認

一

一九四〇年から四一年秋にかけて、開戦直前の時点で連合国側が日本の軍事力をどのように評価していたかを見てみよう。

一九四〇年にマレーに派遣されたオーストラリア第八師団の兵士たちは、次のような文書を配布されていた。

日本軍は残忍で、高度の武装と訓練を身につけている。その肉体的耐久力は偉大なほどある。敵をごまかす技術にたけ、マレーには膨大な第五列を配置し、豊富な上陸作戦の経験を持っている。日本軍は猛烈なスピードで山野を突進し、数日間は補給なしで行動できる。

密林国でこのような日本軍に対抗するには、静かな防御は不適当で、どんな場合でも、敵に遭遇したら攻撃するほかはない。したがって全将兵はまず、ジャングル戦の訓練に熱中すべきである。

ところがアメリカはそうは見ていなかった。

一九四一年九月に発行されたアメリカの航空雑誌『エビエーション』は、日本の航空機技術を次のように報道していた。

日本の軍民の操縦士は、世界一の事故率を示し、日華事変では中国の操縦士に劣り、その年次の養成数は陸海軍を合せて千人足らずである。大空軍の建設には間に合わない。航空技術は模倣一点張りで、アメリカ、イギリス、ドイツ、イタリア、ソ連に遠く及ばない。

外国の製品権を買っても、その原型の性能を出すことすらできない。アメリカの航空専門家たちは躊躇なく、日本の主要な軍用機が旧式か旧式になりつつあると断定できる。

比較の対象となったのは、アメリカ陸軍が制式採用していた戦闘機「バッファロー」だった。航続距離七百五十九マイル、最高速度二百九十五キロ／時、高度四千五百メートル、十二・七ミリ機銃×四基を装備。イギリス陸軍にも供給され、アジア地域におけるイギリス航空兵力の主力をなしていた。

「イギリス本土の防衛用としては、スピードが遅い。し

かしマレーでは十分に間に合う」

マレーのイギリス軍極東総司令官ブルック・ポーハム（中将）は、戦端が開かれる直前の一九四一年十二月三日、記者会見でこう述べて対日戦に自信を示していた。

さらにアメリカ海軍省がまとめた敵国情報には、次のようなコメントがあった。

日本の飛行機乗りはいまだかつて航空母艦の甲板から発進したこともなければ、着艦したこともない。せいぜい凡庸な飛行機乗りにしかなれない彼等の気短な気質を考えると、将来彼等が母艦からの発着をうまくできるようになるかどうか、疑わしい。

この判断は全く間違っていた。

『エビエーション』誌が「旧式か旧式になりつつある」と評価した日本の軍用機は、実際のところでいうと当時の世界水準をはるかに凌駕していた。海軍の要請で三菱重工業名古屋航空機製作所が開発した零式艦上戦闘機（零戦）は、航続距離八百八十五マイル（一千四百キロ）、最高速度三百三十五キロ／時、高度五千四百メートル、七・七ミリ機銃×二、二十ミリ機銃×二を装備していた。

二百五十キロ爆弾を装備し、一回の飛行で片道七百キロを往復できるこの航空機は、そもそも広大な中国大陸の制空権を掌握することにねらいがあった。つまりその要求仕様は基本的に陸軍の要望に基づいたものであって、陸軍を支援するために海軍が設定したのである。

同時にそれは太平洋にも適用できる性能だった。島を拠点に広大な制空権の網を張ることができ、かつ航空母艦で長駆の爆撃が可能であることを意味していた。

航続距離ばかりでなく、航空機同士の戦いでは高度が重要だった。機銃から発射された弾丸は重力の法則によって落下する。つまり上から攻撃すれば弾丸は真っ直ぐ標的に向かうが、下からの攻撃は命中率が悪い。

遭遇したときいかに相手より早く有利な位置につくか――理論上の最大速度と最高高度を実戦で発揮できるか――が勝敗を分けた。零戦はほぼ理論通りだったのに比べ、バッファローは机上の数字だった。

『エビエーション』誌の評価は、重大な誤認だった。実際、開戦の直後、フィリピンの基地が日本の航空機に爆撃されたとき、アメリカ軍は

――近くに空母群がいるに違いない。

と見て、懸命に近海を捜索した。

このときフィリピンのマニラにいたダグラス・マッカーサー（当時はアメリカ極東軍司令官、のち連合軍司令長官）

は、のちのちも

「日本軍は空母で近づき、奇襲攻撃をかけてきた」

と語っている。

だがフィリピンを襲った日本の航空機は、はるか遠方、台湾の基地から出撃したのだった。

またイギリス極東艦隊司令官トーマス・フィリップス（中将）は、

――最も近い日本軍の航空基地は四百マイルも離れている。空からの攻撃を受ける心配はない。

と考えた。

このために航空機の護衛なく出港し、ばかりでなく日本の潜水艦に追尾され、〝虎の子〟のイギリス極東艦隊をあっけなく壊滅させてしまった。

開戦に先立つ十一月、日本との戦争を覚悟したアメリカ合衆国政府が、

――最初の一発は日本に撃たせるべきである。

としたのは、日本軍の戦力をはるかに低く見た分析に基づいていた。

二

相手の力を過小評価したのは連合国軍だけではなかった。日本の大本営は連合国軍の力を次のように分析した。

一、物的戦力は豊富だが、人的戦力は不十分である。とくに米国は、総力戦態勢確立にともない、その政治社会機構に多くの摩擦、紛糾を招くだろう。

二、軍備は優秀だが、進攻拠点を失ったため、その価値は大いに減殺された。

三、英国の戦争遂行能力は海上輸送力に依存している。だが、米国の海上輸送力は貧弱で、援英に徹底できない。

四、米英の遮断分離はその戦争遂行能力に絶大な影響を及ぼす。とくに、英国と自治領植民地などとの分離は、ついに英国の崩壊を招く可能性がある。

五、米英両国民は生活程度が高く、その低下は苦痛である。戦勝の希望がない戦争継続は社会不安をつくりだし、士気の低下を招く。とくに英国の敗戦が米国に及ぼす影響は極めて大きい。

六、米英ソの提携は不自然である。またルーズベルト、チャーチルの政策は、ややもすれば投機冒険に堕し、両国民は必ずしもその指導に悦服していない。

この分析が行われたのは一九四二年三月現在なので開戦

から四か月目である。この時点で日本海軍は、ハワイ真珠湾奇襲攻撃でアメリカ海軍の出鼻をくじき、マレー沖海戦でイギリス極東艦隊を壊滅させ、残余の連合国軍艦隊をスラバヤ沖海戦、バタビア沖海戦で海中に葬っていた。

また陸軍は四一年十二月二十五日に香港、四二年一月二日にマニラ、二月十日にシンガポールを落とし、オランダ領インドシナの占領も間近、フィリピン・コレヒドール要塞は日本軍の包囲で孤立無援という状況にあった。陸海軍とも、向かうところ敵なしの勢いだったといっていい。

東条英機がラジオで

「連戦連勝、ご同慶の至り」

と発言したのはこのときである。

余談だが、「ご同慶の至り」はちょっとした流行語になった。何かの式典に登壇した地方名士が挨拶や祝辞に盛り込んだばかりでなく、庶民が日常の慶事に接したとき、

――それはそれは、ご同慶の至りで。

という具合だった。マッカーサーが脱出したあと、コレヒドール要塞に残された将兵が、ニヤリと笑って

――アイ・シャル・リターン。

とトイレに行く合図にしたのとよく似ている。

穿った見方をすれば、庶民は本能的にこの戦争の空疎さを見抜いていた。

日本の分析はあまりに主観的で、希望的観測に過ぎなかった。だけでなく、自身の力を過大に評価していた。なるほど各戦線で連合国軍は後退に後退を続けていたが、日本とアメリカ合衆国では生産力に格段の差があったし、暗号の解読や統計分析の能力は天と地ほどの違いがあった。

例えば状況分析の第二項目

「軍備は優秀だが、進攻拠点を失ったため、その価値は大いに減殺された」

とあるのだが、航空機の戦いが趨勢を左右するとなれば、陸上の進攻拠点が価値を持つということを大本営は考慮しなかった。敵地を占領し領土に編入するという旧世紀の思考回路が戦略の基礎似合った。

さらにいえば、政府や軍部は自身に内在する齟齬を理解していなかった。正面の敵は東南のイギリス、オランダなのか、太平洋の向こうのアメリカ合衆国なのか、はたまた南方のオーストラリアなのか。

陸軍は

――我らが対すべきは中国、イギリス、オランダである。

と考えていた。このため、

――太平洋とアメリカは海軍に任せる。

と陸軍は言った。

ところがその海軍の中には、西進してアメリカ本土を攻め

るべきとする一派と、陸軍と連携して南方を固めるべきとする一派があった。

西進派は航空戦力すなわち航空母艦重視・戦艦不要論、南進派は輸送力重視・大鑑巨砲論だった。自軍の中の意志統一がないまま、東条は陸軍の力に押し切られて開戦に踏み切ったことになる。

三

話を日米開戦の前に戻す。

一九四一年の秋、大本営や陸軍参謀本部の内で「和平論」「持久論」が台頭した。

まず政府内に出たのは、開戦ののち南方に籠城し、カソリック教界を通じてアメリカ、イギリスと和平交渉を始めようという動きだった。これは近衛文麿の知恵袋とされた産業組合中央金庫理事・井川忠雄などが中心になったとされている。

だがそれは、有利な条件で戦争を続行するための謀略に過ぎなかった。

大本営はもっと大きな誤認を犯していた。

日本帝国陸海軍の中で、戦略立案部門と最前線の間に認識の齟齬が生じていたのだ。

例えば大本営が対米英開戦を決意していたとき、外務省は民間人をも動員して平和的妥協点の模索を並行して進めていた。

しかし陸軍参謀本部は

「宣伝情報的利用に限定し、之を謀略的に利用せざるを可とす」

と冷ややかに評し、さして重要視していなかった。

にもかかわらずその陸軍参謀本部の内部で「持久戦」論が持ち上がったのだから、おかしな話だった。

それというのは、

――ヨーロッパ戦線でイギリスがナチス・ドイツに降伏するのを待ち、アメリカが戦意を喪失することに期待する。

という考え方である。

しかしこの案は海軍が真っ向から拒否した。

その筆頭は連合艦隊司令長官の職にあった山本五十六である。

彼は、

――政治というものは、一度決意したらやり通さなければならない。

と考えていた。戦争もまた、政治であった。

一八八四年（明治十七）、新潟県長岡に生まれた山本は、やや血縁がつながる河井継之助に強く憧れた。

河井は幕末の長岡藩にあって執政となり、万余の官軍を引き受けて奮戦して死んだ。生まれる時と場所が違っていたなら、一国の宰相を務める器量であった、とされる。

山本五十六は一九〇四年（明治三十七）、海軍兵学校を出て戦艦「日進」に乗組み、日本海海戦に参加した。このとき事故で左手の指を失っている。のちアメリカに武官として駐在したとき、ハーバード大学に学んだ。

帰国後、空母「赤城」艦長、一九三〇年（昭和五）海軍航空本部技術部長、三四年中将に昇格し、三五年航空本部長、三六年海軍省次官という経歴を持っている。

三八年に日独伊三国同盟が政治課題となったとき、

――それは対米軍事同盟になる。

として強硬に反対した。武官として駐在したとき、アメリカという国の底力を知ったためだった。

四〇年、大将に昇格したが、現場の戦闘指揮官であることを理由に日米開戦論議には加わらなかった。山本が対英米開戦反対論者であることを知っていた参謀本部が、その発言を封じたとも、あるいは山本自身が議論に参加することを忌避したともいわれている。

――戦うなら、乾坤一擲の短期決戦でなければならず、ひるんではならない。

が持論だった。

山本は海相兼軍令部総長の嶋田繁太郎に書簡を送り、

そろそろ銭勘定する経営家多き由なるも、そんな中途半端にて守勢など固まるものに無之。

少くも英米両主力艦隊を徹底的に撃滅して、太平洋、印度洋より近東経由ドイツと自由に交通し得る態勢まで、作戦は一歩も弛め難しと存居候。

と、安易な和平工作論に反対した。

その一方で彼は、連合艦隊旗艦「長門」、戦艦「陸奥」、空母「蒼龍」を敵艦隊と仮定して、航空機による雷撃訓練を強化した。鹿児島の佐伯湾に停泊している三艦を目標に、空母から発進した艦上攻撃機、双発陸上攻撃機、艦上爆撃機などが低空から模擬魚雷を撃ち込むというものだった。

山本はこのとき

「飛行機でハワイを叩けないものか」

と呟いたという。

翌四一年一月、連合艦隊司令長官に就任した山本は海軍大臣・及川古志郎に私信を発した。

日米戦争に於て我の第一に遂行せざるべからざる要項は、開戦劈頭敵主力艦隊を猛撃撃破して、米国海軍及米国民を

して救ふ可かざる程度に、其の士気を阻喪せしむ事是なり。此の如くにして、初めて東亜の要衝に占居して不敗の地歩を確保し、依て以て東亜共栄圏も建設維持し得べし。

同月下旬、連合艦隊司令部は第十一航空艦隊参謀長・大西瀧治郎（少将）に真珠湾攻撃の研究を極秘で依頼した。大西は山本と同じく航空主兵、艦隊無用論者だった。大西の指示で作戦計画を練ったのは源田實という海軍少佐である。

源田は

――これからの海の戦争は、航空母艦が中心になる。

と考えていた。

その意味で彼は山本―大西ラインの直系にあった。

ハワイの近くで発艦した航空機によって真珠湾を叩くには二百五十キロ爆弾でなく魚雷でなければならなかった。大日本帝国海軍が保有していた魚雷は、航空機から落とされるといったん水面下六十メートルまで沈み、起動したスクリューで指定深度を確保する。

真珠湾の水深は十二メートルだった。であればこそアメリカ太平洋艦隊は雷撃を受けることなど一切心配していなかった。常識では不可能だったからだ。

源田は第三航空艦隊参謀・淵田美津雄（当時少佐）と相談し、次のような結論を得た。

――高度十メートル以下で魚雷を水平に投下すれば、不可能ではない。

～～～～　補　注　～～～～

ブルック・ポーハム　Robert Brooke-Popham／1878～1953。名を「ポッファム」とする表記もある。シンガポール陥落直前までイギリス極東司令部の最高司令官だった。第二次世界対戦後、イギリス空軍（RAF）司令官となった。最終階級は空軍大将。

トーマス・フィリップス　Thomas Spencer Vaughan Phillips／1888～1941。一九四一年十二月二日イギリス東洋艦隊司令官に就任し、その八日後の十二月十日、マレー沖海戦で沈没した乗艦プリンス・オブ・ウェールズと運命をともにした。最終階級は海軍大将。

雑誌「エビエーション」　太平洋戦争前から発行されていた航空専門の雑誌で、現在は「エビエーション&ウィーク」と誌名を変更している。

戦闘機「バッファロー」　制式採用後の名称は「ブリュースター／F2Aバッファロー」。アメリカ海軍に配属された最初の単葉機で、一九三六年に策定された海軍次期艦上戦闘機の要求仕様（単葉機、折りたたみ翼、引き込み脚、密閉式コクピット）に沿ってブリュースター社、グラマン社、セバスキー社が競争試作に参加し、ブリュースター社が受注に成功した。航続　距離約一千二百七十キロ、最大速度二百九十五キロ／時、十二・七ミリ機銃四基を装備し、最高高度は六千百メートルだった。しかし実際はそれよりかなり遅かったといわれる。

マッカーサーの誤解　『マッカーサー回顧録』による。ついでながら当時のアメリカでは、「日本人は乳幼児のころ母親の背中に背負われて育つため、多くが三半規管に異常を持ち、満足に飛行機を操縦できない」と考える人が多かった。マッカーサーもそうした俗信のとりこだった。

イギリス極東艦隊の壊滅　開戦直後、イギリス極東艦隊は旗艦「プリンス・オブ・ウェールズ」などを日本軍航空機の攻撃で失った。日本軍は艦船対航空機という新しい戦法を開きながら、自身はその対応ができず自滅していく。

イギリス極東艦隊　インドネシア～オーストラリア～インド地域を所管するABDA（American-British-Dutch-Australian）司令部の中核部隊だった。

　戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」、巡洋戦艦「レパルス」を中心とするZ部隊。ここに大型空母「インドミタブル」が配備されているはずだった。ところがインドミタブルは大西洋を横断してインド洋に向かう途中、四一年十一月三日、ジャマイカ沖で座礁し航行不能に陥っていた。インド洋に到着したのは四二年一月のことだった。

戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」　排水量三万六千七百二十七トン、全長二百二十七・一メートル、全幅三十一・四メートル。キングジョージV世級の二番艦として四一年三月に就役し、同年五月ナチス・ドイツ海軍の戦艦ビスマルクと大西洋で交戦した。そのとき被弾損傷したため補修を受けたのちイ　ギリス極東軍に配備された。四連装の三十六センチ砲二基、　連装一基の主砲十門を装備していた。艦名は代々の英国皇太子に由来している。

巡洋戦艦「レパルス」　レナウン級巡洋戦艦の二番艦として一九一六年に就役した。二度の兵装強化で連装三十八センチ砲三基、

三連装十センチ砲五基、魚雷発射管二基を備えていた。排水量は三万八千二百トン、全長二百四十二メートル、全幅三十一・三メートル。巡洋戦艦は巡洋艦に戦艦並みの攻撃力を備え、戦艦より高速に航行できることから、第二次大戦の主要国海軍が砲艦の主力とした。

井川忠雄　いかわ・ただお／1893～1947。島根県出身、旧制仙台一中から東京帝国大学法科大学生時学科を出て大蔵省に入った。近衛文磨を座長として一九三三年十二月末に発足した「昭和研究会」に参加し、民間交渉による日米・日英開戦回避に尽力した。

産業組合中央金庫　一九二三年、政府および産業組合（農業協同組合の前身）とその連合会の出資で設立された。のち日本農林中央金庫となった。

河井継之助　かわい・つぐのすけ／1827～1868。名の読みは「つぎのすけ」とも。諱は「秋義」。越後長岡城牧野家の藩政改革を推進した。戊辰戦争では長岡藩の「独立特行」を主張して維新政府軍と和平交渉を行ったが、決裂して戦闘となった。「北越戦争」と称される戦いに敗れ、会津に向かう途中、只見村で死去した。

及川古志郎　おいかわ・こしろう／1883～1958。岩手県に生まれ一九〇三年海軍兵学校卒、のち海軍大学校卒。二八年少将・呉鎮守府参謀長、第一航空戦隊司令官、海軍兵学校校長を経て中将、三八年第三艦隊司令官、三六年航空本部長、三八年支那方面艦隊司令長官兼第三艦隊司令長官、三九年大将。四〇年海相に就任し、対米英開戦について明確な考えを示すことがないまま戦争に突入した遠因を作った。四四年軍令部総長としてマリアナ沖海戦、レイテ沖海戦を指導し大敗、終戦時は軍事参事官の職にあった。

大西瀧治郎　おおにし・たきじろう／1891～1945。兵庫県に生まれ、一九一二年海軍兵学校卒。一八年からイギリス、フランスに駐在し、帰国後は航空兵力の拡充に努めた。三九年第二連合航空隊司令官、四二年航空本部総務部長、四三年中将、四四年第一航空艦隊司令長官、軍令部長として航空機による特別攻撃（特攻）を指導した。ポツダム宣言受諾をめぐる協議で徹底抗戦を主張したが容れられず自決した。

淵田美津雄　ふちだ・みつお／1902～1976。海軍兵学校五十二期。同期に源田實、高松宮宣仁王がいる。一九四一年第一航空艦隊の赤城飛行長として真珠湾攻撃の特殊訓練を指導した。真珠湾攻撃における空襲部隊の総指揮官で、全機突入せよの「ト・ト・ト」信号、奇襲成功を伝える「トラトラトラ」を発信した人物でもある。しばらく連合艦隊がハワイ沖にとどまって、真珠湾に不在だったアメリカ航空母艦を叩くべきと進言したが受け入れられなかった。第二次大戦後はキリスト教の伝道に努めた。

日本IT書紀　058 誤認

著　者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
http://www.ossaj.org/
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。